

編集後記

年の瀬を迎え、日毎に寒さが増し、キャンパスに彩りを添えていた木々たちもすっかり葉を落として、来春に芽吹くための準備を始めています。今号からは、発刊時期が夏から冬へと変わり、昨年度までは初夏に執筆されていた編集後記も、今年度は初冬に執筆しております。

今号も、玉稿をお寄せ頂いた先生方や、インタビューに応じてくださった先生方、論文の公募に応募くださった方々のお陰様で、大変充実した内容を掲載できる運びとなりました。心より御礼申し上げます。

* * *

司法制度改革の一環として設立された法科大学院が20年という節目を迎えるのを前にして、一定の条件を満たせば、在学中に司法試験を受験できるようになりました。これに合わせて、司法試験の実施日程も5月から7月に移動し、例年であれば『Law&Practice』の編集作業が佳境を迎える7月中旬に司法試験が行われました。

このような制度の変革期において、法科大学院設立初期から受け継がれてきた『Law&Practice』を如何にして持続可能性のあるものとして変容させることができるのか、変えるべきものとそうでないものを洗い出す作業から取り組みました。

発刊時期については、編集委員の多くが在学中司法試験の受験を予定していたため、これまでのスケジュールを踏襲することは事実上不可能でした。そこで、冒頭でも触れましたように、発刊時期を夏から冬へと移動させることとなりました。

また、これまでは依頼してご執筆いただく論文を主に掲載していましたが、法科大学院を修了されて活躍されているOB・OGの方々や、現役の法科大学院生にとって、『Law&Practice』をより身近な存在にしたいという思いから、今号より論文の公募を正式に開始いたしました。今後も積極的にご応募いただけることを期待しております。

* * *

至らない点も多々あったかと思いますが、今号も『Law&Practice』を無事発刊できますことは、論文の執筆やインタビューを御快諾くださった先生方や、論文の公募という新たな取り組みに賛同して応募してくださった方々、査読委員を務めていただいた早稲田大学法科大学院の先生方、稲門法曹会を中心とする本学の卒業生・修了生の先生方、ご寄付を賜った先生方、三美印刷株式会社様、編集委員の皆様、これまで活動に関わっていただきましたすべての皆様のお陰です。心より深謝申し上げます。本当にありがとうございました。

編集長 松村健太郎